

# 信濃川 水辺の楽校つまりっ子ひろばの野鳥



**カワラビロ** (アトリ科)

スズメほどの大きさで、水辺や里山に群れて生息し、早春に木のこすえで「キリリコロロ・ジュイ」と鳴く。秋になると川原に群れて降雪前に暖地へ集団で移動する。



**ヒバリ** (ヒバリ科)

モズほどの大きさで、水辺や堤防で空高く飛び立ち、もっぱら鳴いている。後頭部に短いかんむり羽がある。よく知られる身近な野鳥で、暖地で越冬する。



**ホオジロ** (ホオジロ科)

早春の木の枝で「イッピツケイジョー」と美しい声で鳴き続ける。スズメより少し大きく、林のふちを好んですむ。木の枝や電線などに止まり、胸を反らしてさえる。



**コゲラ** (キツツキ科)

キツツキ類のなかでは最も小さく、体長は13cm程度。留鳥であるため、秋や冬でも低地の林などで見かけることができる。木の幹をつついて枯木のなかの虫を探す。



**ノジコ** (ホオジロ科)

夏鳥として本州で繁殖する。十日町には数多く生息するが、他の地域ではあまり見られない。ホオジロと同じくらいの大きさで、黄色い胸が特徴。鳴き声はホオジロより美しい。



**キジバト** (ハト科)

体長35cm程度で、「デッポー・デッポー」と鳴く。留鳥として平地や山地の林にすむ。ドバトや伝書バトと種類が異なる。



**トビ** (ワシタカ科)

留鳥として日本全国に分布し、生息数は多い。「ピー・ヒョロロー」と鳴きながら、大空に大きな輪を描いて飛ぶ。ワシタカ科のなかで唯一、尾の形が三味線のバチのような形をしている。



ハシフトガラス

ハシボンガラス

**ハシフトガラス** (カラス科)

太いちばしが特徴で、名前の由来となっている。非常に頭が良く、「カアカア」と鳴く。ハシボンガラスはハシフトガラスに比べて体が小さく、くちばしが細い。「ガアガア」と濁った声で鳴く。



**セグロセキレイ** (セキレイ科)

ツバメほどの大きさで、背中が黒く、腹が白い。長い尾を上下に振りながら、水辺の石の上を飛び回る。「ジージー・チチージョイ」と鳴く。



**ハクセキレイ** (セキレイ科)

セグロセキレイによく似ている。雑食性が強く、他のセキレイ類を山地に追い出した新興勢力。以前は河口部や海岸でよく見られた。



**キセキレイ** (セキレイ科)

十日町地方では「イシバタキ」と呼ばれる。電線や屋根の上で「チチッ」と鳴く。以前はよく見られたが、近年は清流の谷川に住みかを求め、生息数が減少している。



**シジュウカラ** (シジュウカラ科)

日本全国に留鳥として群れてすむ。スズメほどの大きさで、白いほおが特徴。「ツビー、ツビー」とかわいい声で鳴く。秋になるとヤマガラやエナガと一緒に群れて見られる。



**マヒワ** (アトリ科)

スズメくらいの大きさで、頸部から腹部が黄色いのが特徴。川原のアキグミが赤く色付く頃、大群で飛来する。渡りの途中、水辺の雑木林で羽を休める渡り鳥。

**カワセミ** (カワセミ科)

スズメほどの大きさで、体に比べて頭部が大きく、くちばしが長い。湖沼や河川などの水辺にすみ、小魚を狙う。ヒスイ色の羽が美しく、「水辺の宝石」とも呼ばれる。1年中見ることが出来る。

**アカゲラ** (キツツキ科)

体長は20cm程度。丈夫なくちばしを使って木の幹に穴を掘り、木のなかの虫を探して食べる。「キョッ、キョッ」と鳴き、山地の林で見られるが、生息数は少ない。

**ダイサギ** (サギ科)

白く、大きなダイサギは羽を広げると1m以上にもなる。川の浅瀬で魚をとる姿は女王のように美しい。ゆっくりと羽ばたき、首をZ状に曲げて飛ぶ。

**カンムリカイツブリ** (カイツブリ科)

信濃川でも小形のカイツブリをよく見ることが出来るが、カンムリカイツブリはめったにお目にかかれない珍しい野鳥。体長はカイツブリ類でも最も大きく50〜60cm程度。

**カルガモ** (カモ科: 淡水カモ類)

全国的に分布する。くちばしの先が黄色く、よく目立つ。多くのカモ類が春に北に渡るが、カルガモは渡りをせず、春には十日町など積雪が多く寒い地域でも繁殖する。

**コガモ** (カモ科: 淡水カモ類)

雄は美しい冬羽をもつ。めずはカルガモによく似ているが、小さいため区別できる。秋になると他のカモ類とともに渡ってくる。

**マガモ** (カモ科: 淡水カモ類)

ごく普通に見られる大形のカモで、「青首」と呼ばれる緑色の頭部が特徴。また雄の冬羽は美しい。「グエツ、グエツ」と鳴き、秋に渡ってきて、春に北へ帰っていく。

**ハシビロガモ** (カモ科: 淡水カモ類)

名前のとおり、くちばしが広いのが特徴。十日町では珍しいカモであるが、秋には北方から山本山調整地(小千谷市)などに100羽単位で飛来することもある。

**オシドリ** (カモ科: 淡水カモ類)

雄はカモ類のなかで、もっとも美しいイチヨウ冬羽が特徴。留鳥、漂鳥で、山地の渓流でも見られることがあり、水面だけでなく、木に止まることもある。

**キンクロハジロ** (カモ科: 海カモ類)

後頭の垂れ下がったかんむり羽が特徴。白と黒の小さなキンクロハジロは水に潜るのが非常にうまく、水中で小魚などをつかまえて食べる。

**ホシハジロ** (カモ科: 海カモ類)

キンクロハジロと同じく水に潜ることを得意とする。雄は頭部・頸部が赤褐色、胸は黒色をしている。信濃川でもよく見られるが、渡ってくる個体数は年によって異なる。



# 水辺の楽校つまりっ子ひろばの野鳥

## ●環境の変化が野鳥の住みかを変える



### コチドリ (チドリ科)

河口付近や小石の多い水辺で繁殖していた野鳥であったが、次第に川を遡り、最近では山間地の畑や砂利だらけのダムの工事現場などで見かけられるようになった。川原や水辺を走り回る自動車やバイクがコチドリを追い出してしまったのだ。チドリ類のなかで最も小さく、千鳥足ですばやく歩く。よく似たチドリに少し大きいイカルチドリ(留鳥)がいる。

### オオヨシキリ (ウグイス科)

「行々子」「ギョギョシ」とにぎやかに鳴くこの鳥は、水辺の葦(よし)を住みかとする鳥として、歌にもよく詠まれる。しかし、河川護岸の整備により葦が少なくなった現在では、山間地の休耕田に生い茂る葦が巣づくりの場となり、山歩きの際に思いがけず、にぎやかな声を聞くことができる。スズメよりも大きく、体長20cm程度。オオヨシキリの鳴き声が初夏の到来を告げてくれる。



### オジロワシ (ワシタカ科)

国の天然記念物。オジロワシは毎年2~3羽、十日町地方に越冬のため飛来し、3月半ばまでとどまる。宮中えん堤付近の大木に止まり、放水路から吐き出される魚を狙う。トビよりも大きく体長は90cm程度で、翼を広げると2mを超えるものもいる。成鳥の白い尾がよく目立つ。知床半島、カムチャッカ半島など北方で繁殖する。減水の影響のためか、信濃川にはオジロワシのえさとなる魚が少なくなり、いつまでその姿を見ることができると心配される。

### アオサギ (サギ科)

日本で確認されるサギ類のなかでもっとも大きく、体長は90cm程度になる。「ギャッ」という鋭い鳴き声とは対照的に、信濃川の浅瀬で小魚を狙う姿は美しい。長岡の河川敷付近から次第に上流へと営巣場所を変え、クルマヤハリエンジュに巣をつくる。妻有大橋下流の信濃川左岸(川西地区)に集団営巣地(コロニー)があり、毎年ひなが巣立っている。宮中取水ダム(中里地区)にもコロニーがあり、留鳥として1年中見ることができるといえる。

